

「第二十三回庭野平和賞」 庭野日鑛総裁あいさつ

本日は、「第二十三回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、多くのご来賓のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。今年度の「庭野平和賞」を、イスラエルのユダヤ教聖職者を中心に組織されている人権擁護団体・「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」にお贈りできますことを、大変光栄に思います。「庭野平和賞」が、ユダヤ教を信奉する個人および団体に贈呈されることは、今回が初めてであります。その意味で、本日の贈呈式は、非常に大きな意義があると受けとめております。

先ほどもご紹介がありましたように、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」は、パレスチナ人の人権擁護をはじめ、宗教や民族、性別による差別を解消するための活動を多彩に進めておられます。イスラエルとパレスチナの関係は、国際的に最も憂慮される課題の一つです。同時に、他の地域でも、国家間、民族間の対立が多発しています。争いを激化させている要素として、宗教的過激主義の台頭が指摘されていることは、皆さまもご承知の通りであります。宗教の名のもとに、自己を正当化し、他を排斥することは、宗教の本質と、決して相容れません。そのような中で、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」は、「神が真に望んでおられものは何か」をつきつめられ、「すべての人間の尊厳」というユダヤ教の根幹となる教えを組織の基盤に据えておられます。いまだに不安定な状況にあるイスラエルの地で、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」が、「人間の尊厳」という宗教的本質を実現できるよう、日夜努力されていることに、改めて深く敬意を表する次第であります。

これまでイスラエルとパレスチナは、それぞれの権利、安全を求めて、武力による争いを続けてきました。この点について、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」の皆さまは、こう述べられています。

「隣人への愛・正義を求めるユダヤ教の教えに従うことが、そこに住むすべての人々により大きな治安と安全をもたらす」と。

政治の世界は、一般的に「力」による問題解決を目指します。しかし、それでは、「怨みの連鎖」「暴力の連鎖」を招くのは必定です。たとえ表面的には平穏に見えても、争いの火種はくすぶり続けます。

仏教の法句経に、次のように説かれています。

『まことに、怨みは怨みによっては消ゆることなし。慈悲によってのみ消ゆるものなり』

宗教の世界は、あくまで非暴力を貫くべきものであり、愛や慈悲を通して、人々の心に「人間の尊厳」「いのちの尊厳」への自覚を培うことなしに、真の平安、平和は訪れないと教えるのです。

その意味で、「隣人への愛・正義が、より大きな治安と安全をもたらす」という「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」の皆さまの信念は、この釈尊の教えと一つであります。それぞれの宗教をつきつめれば、やがて共通する核心にたどりつくことを、改めて思い知るのであります。

「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」は、一九八八年に創立されて以来、深い宗教性をもとに、「諸宗教対話」「教育」「非暴力フィールドワーク」「法的活動」などを積極的に推進してこられました。とりわけ、広い意味での教育活動に大きな比重を置いてこられたと伺っています。

教育の一番の根幹は、単なる知識教育ではなく、宗教教育にあることは、多くの方が指摘するところでもあります。しかし、宗教者が教育を進めるとき、もし自己の宗教の正当性ばかりを教えるならば、むしろ対立の種を蒔くことにもなりかねません。大事なのは、宗教の普遍的価値を知らしめることでありましょう。

この「普遍」ということについて、日ごろ私は、普遍・特殊・個々という三つの見方、いわば「三極式」ともいうべきものにあてはめてとらえております。「普遍」とは、法、真理のことです。「特殊」とは、神であり、仏のことです。「個々」とは、一人ひとりの個人のことです。そして、真の宗教教育とは、まさに、この「普遍」を伝えることにあると信じます。人は、普遍の真理に触れることにより、相対的な見方を超えて、普遍・絶対の一つの世界、共に生かされて生きる、共生の世界を知ることができるのであります。

その意味で、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」の皆さまは、長年にわたり、「すべての人間の尊厳を守る」「あらゆる人間の内に神を見る」というユダヤ教の普遍的な価値に一人でも多くの人に気づいてもらえるよう努力を重ねてこられました。その使命は、今後、ますます大きくなるに違いありません。

私は冒頭、「ユダヤ教の方々に初めて庭野平和賞をお贈りできることは、非常に大きな意義がある」と申し上げました。なぜなら、日本では、ユダヤ教に対する理解が、必ずしも十分とはいえないからであります。一部には、理解の不足から生じる誤解もあろうかと思えます。そうした中、私は、「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」の皆さまにお会

いし、活動に注がれている深い愛、ユダヤ教の神髄というものに触れることができました。このことに、何よりも感謝を申し上げたいと思います。

イスラエル、パレスチナの間には、いまだ数多くの課題が横たわっています。宗教や民族、性別による差別も繰り返されております。本日の贈呈式を契機として、「すべての人間の尊厳」を守るという意識が一人でも多くの人々の心に根づくよう、また「ラバイズ・フォー・ヒューマン・ライツ」の皆さまが一層ご活躍くださることを祈念して、あいさつと致します。

皆さま、誠にありがとうございました。